廃校が生まれ変わって“学校蔵”へ

新潟・佐渡島の西側、真野湾に面した丘の上に立つ、「日本一夕日がきれいな小学校」は、2010年3月、惜しまれつつも閉校となった。
「この場所を、なんとかして残したい」――。その熱い想いは4年の時を経て形となり、廃校は「学校蔵」として、再び「皆が集う場所」となった。

〝モロミ君〟。酒知識の蓄積を進め、酒を専門とする酒蔵ロボットとして育成される

造ったお酒の名前は『学校蔵』（それぞれの年度、仕込み番号が付く）　アルコール分：15%～18%（年度、タンクにより異なる）
720㎖、1.8ℓ・1500円、3000円

思い出が詰まった校舎を酒造りの場に再生
――尾畑酒造（新潟県佐渡市）

西三川小学校は、１８７３年に開校。かつては２００名以上の児童生徒が通い、人々の集う場として地元で愛され続けてきた。しかし、島内の市町村合併や少子化に伴って徐々に児童数が減り、廃校を余儀なくされた

当時、小学校統廃合後の児童の受け入れ校でＰＴＡ会長を務めていたのが、老舗の蔵元である尾畑酒造社長・平島健さんだった。何度も西三川小学校に足を運び、地元の人たちの声を聞くにつれ、「この思い出がいっぱい詰まった木造校舎をなんとか自分の手で再生したい」という想いが強くなっていったという。

その一方で平島さんは、日本酒の造り手として、今後多くの島内外の人たちに日本酒の良さを広めるべく、意欲ある人に日本酒造りを学んでもらえる場を提供したいとも考えていた。「ここを、酒造りの場として再生できないだろうか」。そう思いついた平島さんは、奥様である同蔵の５代目の留美子さんとともに、閉校後の校舎を借り受け「学校蔵」として蘇らせるプロジェクトを立ち上げた。地元住民たちの温かい声も後押しし、廃校は、夏場の「酒造り」をはじめ、ワークショップの開催や仕込みの体験ができる「学び」「交流」の場として生まれ変わった。

ここでは、最新技術を駆使した試みも実施されている。それが、新入生としてやってきた、ＮＴＴ東日本「ロボコネクト」こと〝モロミ君〟だ。彼の仕事は、センサーと通信技術を使って、離れた場所にいながら仕込みタンクの温度と湿度の計測値を報告すること。正確なデータを読み取って蓄積することで杜氏の技術や判断を支える、なんとも心強い存在だ。さらに酒の基礎知識をインプットしていき、酒に関する質問に答えられるよう、成長させていく予定だという。

今後も「学校蔵」では、新しいものも取り入れながら、米や水はもちろん、自然エネルギーまでをも「佐渡産」にこだわり、環境に優しいものづくりを進めていく。

使用する主な米は、国際保護鳥である朱鷺との共生を目指した「朱鷺と暮らす郷づくり認証米」にも認定されている

「ここで造ったお酒を飲みながら、子どもたちのために植えた桜の下で毎年花見ができれば最高！」と住民は声を揃える

蔵DATA
新潟県佐渡市真野新町449
TEL:0259-55-3171